

令和5年度 学校自己評価(最終評価)

	重点目標	具体的取組	主担当	評価の観点	判定基準	達成目標	判定	達成比率 (判定基準a+b)	○△	分析と今後の課題	アンケート調査結果			
											達成基準	回答	比率	評価基準
1	各教科における授業実践力の向上 児童生徒自らが「わかった」と実感する授業づくり	① 模擬授業と整理会を含めて授業づくりをパッケージ化し、児童生徒が自ら考えるための発問に焦点を当てて授業改善に取り組む。	研究研修課 各部	【成果指標】(教員) 児童生徒の思考を促すため、児童生徒の発達段階を踏まえた発問の内容と方法を工夫し実践することができた。	A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	B	2%		○	発問を工夫し実践した教員は89%であり、達成目標を上回った。具体的には「児童生徒の反応予想から発問を設定した」等児童生徒の思考を深める工夫や、「発問に具体物やイラストを用いた」「発問をイメージできる音楽を活用した」等児童生徒の理解を支える工夫が挙げられた。 今後は、発問以外にも授業の展開や教材の工夫に焦点をあてることを検討している。また、「検討会や模擬授業が参考になった」等の一方、「授業づくりのパッケージを意識できなかった」「自分で発問を考えが難しかった」という意見もあった。教員が協働し授業づくりに取り組む「授業づくりのパッケージ化」について、さらに定着を図っていく必要がある。	b以上	89%	a 33% b 56% c 10% d 2%	実践した やや実践した あまり実践しなかった 実践しなかった
		② 教師の視点からの授業評価だけでなく、児童生徒にとって理解しやすい授業であったか等について、児童生徒からの評価をもとに授業改善に活かす。	各部	【満足度指標】(児童生徒) 児童生徒が「わかった」と感じる授業であったかを、アンケート調査や行動内面を含む)の変容等で評価する。	A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	B	5%		○	児童生徒が「わかった」と感じる授業を実践できた教員の割合は76%であり、達成目標を上回った。また、授業を改善したと回答した教員は92%であり、児童生徒が理解できたと評価した授業についてもさらに改善をしたという結果となった。 今年度授業整理会で焦点化した「発問」の改善の他に、「教材の工夫」「児童生徒への働きかけの工夫」「児童生徒の思考が深まる展開の工夫」が改善点として挙げており、今後も継続して授業改善に取り組んでいきたい。	b以上	76%	a 30% b 46% c 19% d 5%	「授業がわかった」と見て取れる児童生徒の割合が80%以上 「授業がわかった」と見て取れる児童生徒の割合が70%以上 「授業がわかった」と見て取れる児童生徒の割合が60%以上 「授業がわかった」と見て取れる児童生徒の割合が60%未満
2	小学部から高等部までのつながりのある教育活動の実現 部門・学部を超えた交流及び共同学習、連携、社会へのつなぎ	① 他部門と連携し、他学部と系統性のある指導を行うため、参観やVTRの視聴により効果よく互見授業を実施する。	研究研修課	【成果指標】(教員) 他学部の授業を参観する。または、授業を動画撮影して視聴する。	A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	B	1%		○	授業の参観を行った教員は85%であり、達成目標を上回った。授業を参観した教員のうち「直接参観した」は11%、「授業VTRで参観した」は69%、「どちらも行っ」は6%であった。参観に関しては「学部を越えて参考にできる教材があった」「授業の工夫を他部門から学ぶことも良かった」等の意見があった。VTRの共有に関しては「都合に合わせて視聴できた」「繰り返し視聴できてよかった」等の意見があり、有効に活用されたと考える。 VTRに関して「共有場所が分かりにくい」等の意見があることを踏まえ、今後は授業VTRの共有案内を分かりやすく改善し、部門・学部を越えた授業互見の活性化を図りたい。	b以上	85%	a 48% b 37% c 14%	2本以上参観した 1本参観した 参観しなかった
		② 学習活動や行事等において、他部門や他学部とともに取り組む機会を企画し、実施する。	各部	【成果指標】(教員) 他部門や他学部とともに取り組む学習活動を企画し、実施することができた。	A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	B	64%		△	他部門や他学部とともに取り組む機会を企画、実施した教員の割合は64%であった。達成目標には届かなかったが、2回以上実施したのは41%で半数近い結果となった。実施した教員は、「普段と異なる人間関係の中でも積極的にコミュニケーションを図ろうとしていた」「他学部の友達のことを知ることができた」「上級生や下級生との関わりから主体的に行動する姿があった」など、取組の効果を実感することができた。 実施できなかった教員も多くあり、教育的効果を踏まえうえで年間指導計画に組み込むなど計画的に実施を進めていきたい。	b以上	64%	a 41% b 23% c 36%	2回以上実施した 1回実施した 実施しなかった
3	インクルーシブ教育の推進 児童生徒・教職員・保護者・地域が、互いに理解し合い、支え合う社会を目指した取組	① 本校のインクルーシブ教育に関する取組を、ホームページや学校だよりを含め、様々な方法で情報発信する。	各部 インクルーシブ教育推進委員会	【成果指標】(保護者) インクルーシブ教育に関する取組について様々な方法で情報発信を行う。	A 200回以上 B 120回以上 C 90回以上 D 90回未満	B	176回		○	インクルーシブ教育への取組を発信した回数は176回で、達成目標を上回る結果となった。また、インクルーシブ教育についてホームページや学級だより等で見たことがあると回答した保護者は86%であり、多くの保護者が何らかの形で目にする事ができたと考える。 令和7年度版の障害教育部門高等部の移転も見据えて、今後も様々な機会を捉えて、広く取組について周知していく必要がある。	120回以上	176回	前期 121回 後期 55回	
		② 交流校、地域、関係機関等、交流活動を実施した相手先に、交流に関するアンケート調査をする。	各部 インクルーシブ教育推進委員会	【満足度指標】(交流相手先) 交流活動への満足度についてアンケート調査を行う。	A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	B	94%		○	交流先80件から回答を得ることができた。交流に満足している、やや満足しているを合わせ94%という結果となった。また、今後も交流を希望すると回答したのは91%であった。交流に満足しなかった中には、障害のある児童生徒との関わり方がわからなかったという回答があり、事前に十分打合せを行う必要性がある。 回数を重ねて理解を深めたいという意見もあり、今後も交流の目的を明確にし、効果的な交流を図ってきたい。	b以上	94%	a 63% b 31% c 4% d 3%	満足した やや満足した あまり満足しなかった 満足しなかった
		③ 本校のインクルーシブ教育に関する取組について保護者が満足しているか、アンケート調査をする。	各部 インクルーシブ教育推進委員会	【満足度指標】(保護者) インクルーシブ教育の取組への満足度についてアンケート調査を行う。	A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	B	88%		○	インクルーシブ教育への取組に満足している、やや満足していると回答した保護者の割合は88%であった。様々な活動の場があることや他校や地域との交流の様子から満足しているという保護者が多くいる一方で、インクルーシブ教育についてよくわからない、もっと地域に働きかけてほしい、我が子が直接活動していないのでわからないなどの意見もあった。 職員の意味も高めながら、インクルーシブ教育についての情報提供を行ってきたい。	b以上	88%	a 37% b 51% c 9% d 2%	満足している やや満足している あまり満足していない 満足していない
4	働き方改革の推進 慣例や前年踏襲の見直し、業務内容のデジタル化、スリム化、情報の一元化による働き方改革	① 業務内容等に応じて、さらにデジタル化を進め、業務のスリム化、効率化を図る。	各課 各部	【成果指標】(教員) 業務内容等に応じて、さらにデジタル化を進め、業務のスリム化、効率化を図ったり、行事を見直したりなど、具体的な取り組みを行うことができた。	A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	B	73%		○	業務のスリム化、効率化を図ることができたと回答した教員は73%で、達成目標を上回った。前期に引き続きICTやタブレット端末を活用した業務の効率化、ペーパーレス化、TeamsやFormsなどの活用、会議の見直しなどに取り組むことにより業務改善を図ることができた教員が多かった。 前年度の踏襲や既存のシステムにこだわらず、新しい視点で業務や会議の在り方を見直すとともに、ICT支援員の活用も図りながら更にデジタル化を進め、業務改善につなげていきたい。	b以	73%	a 20% b 53% c 24% d 3%	できた ややできた あまりできなかった できなかった